

技 が輝く

甲州印伝は、独自の技法により山梨に受け継がれている鹿革の工芸品です。印伝の名称は、「インデア」が変化したものとも、「印度伝来」に由来するとも言われています。体になじみ強度もあることから、戦国時代には、武将たちの鎧や兜に用いられていました。

山に囲まれた甲州では、古くから鹿革や漆が産出され、江戸時代



鹿革に漆で模様を付ける技法



燻べ技法

に鹿革に漆で模様を付ける技法が確立されました。ほかにも、わらと松やにを焼いてその煙でいぶす「燻べ技法」、一色ごとに型紙を替えて色を重ねる「更紗技法」などがあります。

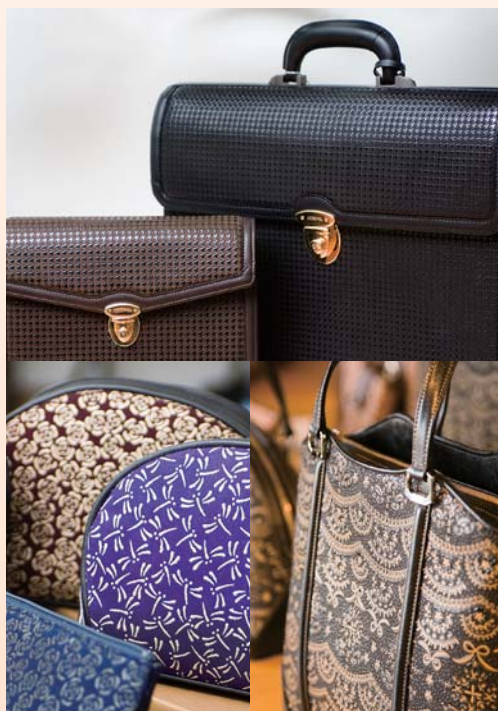
当時、印伝は高価な工芸品でしたが、巾着やたばこ入れなどとして、広く庶民の間でも愛用されてきました。「東海道中膝栗毛」(十返

山梨県

甲州印伝

舎一九)の沼津のくだりで、弥次喜多の二人が、「腰にさげたる印伝の巾着を出し見せる」という場面からも、その様子が見えがえまます。

江戸時代末期に出された「甲府買物独案内」には、甲府で一番華やかな八日町での印伝屋の賑わいが紹介されています。その後、明治時代には粋な旦那衆の間で合切袋が流行り、昭和になると女性向けのハンドバッグも生産され、甲州印伝は山梨を代表する特産品として全国に知られるようになりました。そして、昭和六十二年には、国の伝統的工芸品に指定されています。近年では、伝統的な技法に最新



甲州印伝の製品

のデザインを組み合わせた製品を展開し、性別・年齢を問わず、幅広い層に愛用されています。一昨年、欧州最大規模のインテリア・総合雑貨の見本市である「メゾン・エ・オブジェ」で、「INDEN」は日本を代表する工芸品の一つとして紹介されました。

伝統工芸と最新のデザインの融合により、人々を魅了する甲州印伝。何代にも渡り受け継がれてきた技で、今も新しい製品づくりが進められています。

お問い合わせ

甲府印伝商工業協同組合

TEL 〇五五―二二〇―一六六〇